



研究奨励事業
研究報告

松本清張と金聖鐘
——
日韓の戦後探偵小説比較研究

李
建志

北九州市立

松本清張記念館

松本清張と金聖鐘

——日韓の戦後探偵小説比較研究

李 建志

はじめに

松本清張は戦後の日本ミステリ^{*1}を代表する作家であり、彼の作品はその人生とともにさまざまな分析を施されてきた。彼の業績はミステリだけではなく、古代史から現代史までの歴史への考察や民話などへの関心など多岐にわたっているといつてよく、それぞれ多くの読者を獲得してきた。

それに対して、韓国のミステリ界を代表する作家である金聖鐘については、ありふれて「韓国の松本清張」^{*2}と呼ばれるにもかかわらず、韓国でもほとんど論じられることがない。これは韓国における「純文学」志向が強いことが原因のひとつといえるだろう^{*3}。これは韓国でミステリがあまり育たない原因としても考えられるのだが、このあたりの事情を韓国のベク・ヒュー氏は次のように述べる。

純文学——それでは他の文学は不純だというのか？ この用語は気に入らないけど便宜上こう表現しよう——と違い、国内推理小説の場合、雑誌が伝統的に発行されたことがない。『金聖鐘を読む』、五一頁。図書出版南島(ソウル)、一九九九年。拙訳)

つまり、「文芸誌」はノンジャンルの小説に占められており、ミステリやSFのような作品を発表する場がない。逆にいうと、ミステリやSFの読者は育っていないということだ。この状況は現在でも変わらず、一般の文芸誌や総合雑誌にミステリが急に顔を出すこともなくはないが、ほとんどの場合、韓国のミステリは書き下ろし長編となるか、あるいは新聞連載ということになる。金聖鐘氏自身もともと「文芸誌」で短編を発表しつつ、韓国日報の二百万ウォンの原稿料が懸かった長編小説のコンペで『最後の証人』でミステリ作家としてデビューという経緯はこれを裏付けている。一概にはいえないが、いわゆる「総合雑誌」や「文芸誌」の読者が限られ、ミステリやホラーなどジャンル小説を売りにした雑誌が評判となつている日本とは正反対の状況にあるといつてもいかもしれない。

このような状況を反映してか、文学研究の世界でもいまだに「純文学」という言葉が無批判に使用されたり、ミステリのような「大衆小説」は研究対象にならないという考え方の研究者まで多い。金聖鐘はこのようにして、その大きな業績と裏腹に、研究対象となることなく、放置されてきた^{*4}。

そこで今回は、金聖鐘氏のミステリとその韓国文学での位置について、日本のミステリ就中^{ミカヅク}戦後のミステリ作家としてもっとも重要な位置を占める作家であるといえる松本清張と比較することで、浮き彫りにすることを目指す^{*5}。

1 金聖鐘という作家

金聖鐘は一九四一年に中国山東省済南市で生まれた。「済南事件」の済南である。日本の影響の強かったこの地に、金聖鐘の父母は仕事で出かけていたの

ではないか。彼は自分の過去をあまり語らないが、一九四五年の解放（韓国では日本の敗戦をこう呼ぶ）をうけて、韓国に帰ることになる。彼の本籍地は解放後の韓国で苦難の道を歩むことになる全羅道で、求禮がその故郷となる。ちなみに、松本清張が戦時中に所属していた兵団は全羅北道井邑に駐屯していた。求禮は全羅南道の智異山という霊峰の麓にあり、この山では後日、彼の小説のテーマにもなる人民軍パルチザンが立てこもる事件が起きている。（後述「最後の証人」での事件現場）

長じて彼は延世大学校政治外交学部を卒業した。延世大学校は韓国の名門大学で、日本でいえば早稲田か慶応にあたる。私立大学で比較的「お坊ちゃん大学」というイメージが強い。彼が豊かだったと短絡的にはいえないが、高等教育を受けられなかった松本清張と比べて、恵まれた環境に育っていたといってもいいだろう。

政治外交学部といっても、彼は文学を好み、とくにフランス文学に傾倒したという。韓国の地方紙「大邱日報」の一九九八年三月二十七日、金聖鐘「仕事と夢」によれば、アンドレ・マルローに言及し、大学時代は図書館にこもり、日がな一日フランス文学を読みふけたという。

卒業後、新聞記者などを経て、小説家としてデビューする。一九六九年一月の「朝鮮日報」新春文芸に、彼の書いた短編「警察官」が当選した。これは地方の警察署に流れてきたインテリ警察官（日本風にいえばキャリア）の内面と挫折を描く小説で、警察を舞台にしても基本的には推理小説とは見なされない作品だった。

新聞の新春文芸は、作家になるための最初の登竜門だ。韓国では解放前（戦前）から文学新人賞として、各新聞社の「新春文芸」が目指された。そして

うひとつのルートが「推薦完了」だ。これは、やはり解放前（戦前）の制度の名残であり、いまではこの新春文芸も「推薦完了」もかなり意味合いをかえているが、解放前の朝鮮文壇は、文芸誌に新人の作品を載せるとき、同人の「推薦」を必要とした。たとえば「文章」誌など一九三〇年代後半を代表する雑誌では、新人を発掘する際にまだ「新人賞」というものが制度化されていないこともあり、既存の文壇人による「推薦」を受けなければならぬ。個人的な紹介や、新春文芸の当選者などがつてを伝って「文壇」ににじり寄るのだ。もしも「推薦」がなかった場合、「文壇」（あるいは同人）にその作品の是非を問い、それが優秀とされるなら再び作品を掲載する（推薦する）ことになる。この二度にわたる「推薦」を受けるプロセスを経ることが「推薦完了」なのである。これが一九六〇年代にも、もちろん七〇年代、八〇年代にも生きていた。まさに「文学道」とでもいおうか。「純文学」至上主義が横行する原因のひとつといつていいかもしれない。

ともあれ、金聖鐘も「推薦完了」しなければ作家としてデビューできない。少なくとも「文壇」に認められたとはいえない。金聖鐘がデビューした時代は一九六〇年代末から一九七〇年代初頭、すなわち朴正熙大統領政権下（第三共和国時代）であった。当時は朴正熙による文化系諸団体の統合が進んでおり、文学は「韓国文人協会」ひとつにまとめられていた。まさに「文壇」が権威的政権によって一本化されていたときであり、このプロセスなしに作家活動にはいることはできない、それこそ「推薦」制度のもっとも強かった時代といつていいかもしれない。

話を金聖鐘に戻す。金聖鐘の「推薦完了」は、一九七一年だった。「現代文学」一八五号（一九七〇年五月）に「我が少年だったとき」を掲載、さらに

同誌二〇〇号（一九七一年八月）に「十七年」を発表したのだ。

その後も彼は「文芸誌」などに小説を書き続ける。『月刊文学』四五号（一九七二年八月）に「悲しみ」を、『現代文学』二二三号（一九七三年六月）に「ある娼婦の死」を、そして『北韓』三二号に「鎌」を発表した。これらの雑誌はミステリを専門に扱う雑誌ではもちろんない。しかし、彼が書いた作品は、いま読み返すと多分にミステリの要素が含まれている。その典型が「ある娼婦の死」と「鎌」だろう。彼がこの時期に発表した短編は、ベトナム戦争をテーマとした「悲しみ」をのぞくと、すべて朝鮮戦争の傷跡がテーマとなっている。「ある娼婦の死」は、ソウルの中心街である鍾路である娼婦が死体で見えされる。この捜査をしていた刑事の呉炳鍋は、娼婦がもっていた名刺から三人の男を追跡する。そして、そのなかのひとりが朝鮮戦争中に彼女と生き別れた兄であることがわかる。その兄に当たる人物は彼女が自分の妹だとは知らず、寝物語に自分の生い立ち、朝鮮戦争での妹との生き別れを語る。それをきいてその男が兄だと知った妹は、知らずといえ兄を客としてとつたことを悔いて自殺したのだ。捜査により浮かび上がったその娼婦の生い立ちと、男の生い立ちが一致することを確認し、いたたまれなくなった呉炳鍋は、男を殴りつけて去っていく。本来はうれいはずの生き別れた兄妹の邂逅が、最悪の「罪」として演出され、妹に死をもたらし、兄はその事実さえ知らずに普通に生きている。おそらくは朝鮮であり得ただろう悲劇を、刑事の捜査による事実の暴露で明らかにするという、金聖鐘が後に自身の小説のパターンとする、いわばハードボイルドタッチの小説の原型がここに誕生するわけだ。

また、「鎌」の場合は、ある老人が田舎の駅に降り立つところから始まる。その村のはずれに独りで住む青年に、老人は会いに来たのだ。老人はかつて自分

の父母を共匪（共産ゲリラ）に殺された復讐で、共産ゲリラに食料などをわたしていた村はずれの一軒家の夫婦（彼らは良民）を青年団を組織してリンチ殺人したことがあった。この老人が訪ねていったこの青年は、そのリンチされた夫婦の息子だったのだ。その夜、青年は鎌で老人を殺し、そして自らも果ててしまった。

これらの短編小説が、金聖鐘の作家活動のはじまりだったとわかっていい。「戦争」という謎が、いまを生きるひとびとの行動に影を与える。その影があるいは殺人（あるいは自殺）を呼び起こす。探偵役は刑事であれ、ジャーナリストであれ、それを追求していく。これが韓国ミステリのひとつのかたちだといっているかもしれない。少なくとも、解放後における、代表的ミステリ作家金聖鐘のスタイルだ。

そして一九七四年に先述の「韓国日報」二百万稿料長編小説公募に「最後の証人」が当選した。彼の推理小説作家としての実質的なデビューはここだとみていいだろう。しかし、当時彼は本当にミステリ作家とみられていたのだろうか。先に登場したペク・ヒュー氏は次のように述べる。

一九九六年十月のある日、韓国ミステリクラブは金聖鐘に「最後の証人」を記念する特別賞を授与した。

秋の推理旅行と推理文学読者賞を兼ねた集まりで、クラブの会員たちは過去二〇余年のあいだで「最後の証人」がいちばん優秀な推理作品であると選定したのであった。また、国学資料院から出版された「推理小説とは何か？」では、金聖鐘の推理作品中、唯一「最後の証人」だけが扱われている。

る。

それだけではない。個人的な交渉の次元ではあるが、私がであった多くの読者たちが金聖鐘といえは必ず「最後の証人」を代表的な推理作品として数えているというのが実状だ。

私にはこれは本当に奇異なことであった。

「最後の証人」は一九七四年の「韓国日報」長編小説公募当選作として、推理小説に対する認識が社会全般にわたって微々たるものであった時代に書かれた作品だ。審査委員はもちろんのこと、金聖鐘自身も特別に推理小説だと考えていたようではない。

それでもこの作品が金聖鐘の代表的な推理小説として受け入れられている理由は何か？

おそらくは同族が殺し合う悲劇である六・二五（朝鮮戦争）を重みを持って扱ったせいではないかと推定される。

素材のこれ以上ないような比重に加え、全編に流れるヒューマニズムの感動的な波によって読者が大きく刺激、鼓舞されて、作品にずっばりとはまりこむ魔力があるにはあるが、この作品は推理部分がむしろ弱められている。（前掲『金聖鐘を読む』、七〇～七二頁）

朝鮮戦争という重たいテーマを扱うことが中心になっており、推理小説としての側面が弱まっている。作者もそれを承知でこの小説に向き合ったという*。先にも述べたように、当時の韓国では文化団体はすべて一元化されていた。文学だけでなく映画も一括管理されていたわけである。現在、韓国ソウル市にある「芸術の殿堂」には、かつての韓国映画のフィルムや脚本などが保存され

ている。実はこの「最後の証人」は、新聞連載を経て一九七七年に単行本として出版されたのだが、この小説の評判はよく、三年後である一九八〇年に映画化されている。

ちなみに、筆者が「芸術の殿堂」で閲覧した脚本（一九八〇年九月十七日とある）に記された公式記録によると、封切りはソウル「明宝館」にて十一月十五日～二十五日までで、監督は李斗鏞、脚本は尹三六、動員数は七四二四人と記されている。数字をみてもわかるとおり、映画の評判は芳しくない。一九八〇年制作の全九十一作中ワースト六位という不名誉な記録が残っている。この年に明宝館で上映された全八作中最低の動員数だったという。公開日数が短いのは、途中で打ちきりになったからだろう。

そしてここからが問題なのだが、当時の映画は「分類」がされていた。おそらく韓国映画協会が制作される映画を「文芸」（文学作品をもとにした映画）や、「娯楽」（コメディなど）に分類し、記号を付けているのだ。基本的にこの姿勢は民主化するまで続いたのだが（一九八七年）、この「最後の証人」に付けられた分類が「反共」であったということだ。

周知のように、「反共」とは共産主義と反対・敵対するという意味で、このような分類が映画にされていたこと自体が驚きではあるが、これが朴正熙政権がひいてきた独裁的な権威主義政権、そしてそれをさらに強化した維新体制（第四共和国、一九七二年から一九七九年まで）、さらにその衣鉢を継ぐかたちで成立した全斗煥政権（第五共和国）では、このような分類をしてきたということだ。というところ、この「文芸」と認識されない場合、普通は「娯楽」と「烙印」をおされるところだろうか。こういうところにも「純文学」なるものが生き残る権威的な素地がみえる。

話を金聖鐘に戻そう。「最後の証人」は、新聞連載でもそうだが、この単行本でも「推理小説」と銘打たれているわけではなく、単に「長編小説」とされている。つまり、それは「推理小説」＝「ジャンル小説」という分節をする受け皿が、それまでの韓国にはなかったことを意味しないか。

現実には、韓国にもミステリはあった。解放前（戦前）に金来成という作家が登場し、一九三〇年代後半から一九五〇年代中盤まで、ほとんど彼ひとりが韓国におけるミステリを背負っていた*。それが中断してからは二〇年、韓国にはミステリ作家など存在しなかったのだ。少なくともミステリ作家としてミステリ作品というものが読者に認識されていなかった。そんなとき、金聖鐘が登場する。後述するように、彼の作風は朝鮮戦争時に起きた悲惨な事件と、それにいまだに拘束されるひとびとを描くものであり、その謎となっている「過去に起きたこと＝戦争中に起きたこと」は、探偵役が対立する組織（北朝鮮のスパイ組織など）からつけねられ、過失による殺人を犯し逆に追われる立場に陥りながら、ひとつずつ明らかになっていく。これはまさにハードボイルド・ミステリであり、日本の読者ならこれを素直にミステリとして受け入れるだろうが、当時の韓国においてはそのような専門的な「ジャンル」が絶えて久しかった。しかし、圧倒的な興味と読者の人気をさらった金聖鐘は、やがて人気作家へののぼりつめる。彼の作品には朝鮮戦争の悲劇が描かれ、北朝鮮のスパイによる暗躍とそれを阻止する探偵役との対立が主軸となる。ゆえに、彼の作品が映画化される時、その作品は「純文学」とはみなされなかったため、「文芸」とは分類されなかったが、かといって「娯楽」でもない、朝鮮戦争の悲劇を描いているという意味を込めて「反共」と解釈されたのだ。後述するように世代的な意味合いもあるのだが、彼の書く朝鮮戦争での悲劇とそこに淵源をも

つ「事件」に対するハードボイルドな展開は、国家の主張である「反共」主義とシンクロする、保守派の言説として受け入れられているとみざるをえない。金聖鐘は体制派の人間として目されていたのだ。先に言及した「鎌」が掲載された雑誌『北韓』も、北朝鮮を批判的に検証する雑誌なのだから。

さて、説明が長くなったので、ここで金聖鐘作「最後の証人」の内容について述べてみよう。

一九七二年一月、二〇年ぶりに六三才で出獄した黄岩は、生き別れた息子・泰榮が今生きているのかどうかさえ知らず、とりあえず尚原にいる姉の家に向かう。その姉の息子も、朝鮮戦争で両足を失い絶望的な人生を送っている。

この後、黄岩がどうなったのかわからないまま、一九七三年一月下旬のある晩、弁護士・金重燁が殺された。物取りの犯行ではないため、怨恨が考えられるが、調査も不調におわり、事件解決のめどはたたなかった。それから五カ月が過ぎた一九七三年六月に、全羅南道文昌で殺人事件が起きた。その地域で大きく醸造業を営む梁達秀という五八才の男が、町から三十里離れた龍王里貯水池で殺されていたのだ。金にきたなかったためか、梁達秀の評判があまりよくなく、やはり怨恨の線で捜査が開始された。事件当日、彼が朴振泰という青年と貯水池に釣りに出かけ、その青年が姿をくらましていたので、朴振泰への嫌疑が高まったが、証拠不十分で無罪となる。

この事件の捜査本部がある龍王里支署主任である呉炳鍋は、道警察が物証のない朴振泰を容疑者とする捜査方法に疑問を持つ。しかし、指揮権がない彼は黙っているしかなかった。本署に呼ばれた呉炳鍋は、署長から今回の事件の担当をいつかり、呉炳鍋は単独行動を許される。

彼はまず梁達秀のいた文昌に向かい、独自の事情聴取をする。梁達秀は朝鮮戦争直後に、他郷からやってきて醸造業をはじめたこと、梁達秀の妻・孫芝恵（三八才）は実は妾であったこと、そして彼女は高校生の娘・杳蓮とともに本妻に追い出されてしまったことを知る。朴振泰の親友・申相祐に朴振泰の居所を確認した呉炳鍋は、直接彼に会いに行く。そこで杳蓮と朴振泰が恋仲にあることが知れた。また、梁達秀が残したことは「世の中というものは罪をつくっては生きづらいものだ」が気にかかる。

貯水池から、呉炳鍋は犯人の足取りを追うと、山のなかにセメントでできた小さな屠殺場を発見する。そこに住む蔡という白丁*は、ここに金禹植という寡黙な青年がいて、殺人事件の翌日に出ていったという情報をくれる。

梁達秀の故郷・豊山に行くと、彼の戸籍には本妻・李福順、長男の宗泰以下三人の息子と妾の子・杳蓮の名前があった。実家には長男と本妻がおり、梁達秀が元は農民であったこと、そして二〇年前に急に羽振りがよくなったことがわかる。また、彼の遺品を調べるうち金重燁の電話番号が手帳に書かれているのを発見、さらに彼が朝鮮戦争当時、青年団長として働き、姜晩浩、孫芝恵（梁達秀の妾）ら十一人のパルチザンと民間人・黄岩、韓東周、あわせて十三人を投降させたということ、またその姜晩浩が生きていることを確認、姜晩浩と早稲田大学の同窓生で中学校長をしている曹益鉉を訪ね、パルチザンであることを直接聞くことに成功する。

パルチザンの司令官だった東京帝国大学哲学科出身の孫石鎮は肅清されたが、一家の財産を隠した地図とともに、娘・孫芝恵を同郷の後輩・姜晩浩に託していた。一九五二年夏、智異山のパルチザンはほとんど壊滅状態であり、姜晩浩率いる第一五地区人民遊撃隊も十三人にまで減った。黄岩は思想を云々で

きるような教養はなかったただ純朴な男だったが、韓東周はもともと左翼傾向のある人物であった。彼らはあえて山を下りて小学校の地下に潜伏していた。唯一の女性・孫芝恵はまだ十八才であったが、姜晩浩が彼女を慰安婦のように扱い、黄岩以外の十一人の男に輪姦させており、お腹には姜晩浩の子がいた。これが、後に黄岩が自分の子とする泰栄だった。

最後に、姜晩浩は東京留学時代の同窓生であった曹益鉉を通じて、地域の青年団長・梁達秀に会い、身の安全を保証してもらって、投降計画を立てる。黄岩は腹痛だと偽って潜伏先に孫芝恵とともに残り、他の隊員は姜晩浩が食糧補給に一斉動員する。その隙に黄岩と孫芝恵は投降し、姜晩浩は残りの隊員に投降をすすめるというものだ。ところが、韓東周も不調を訴え潜伏先に残り、投降の邪魔をしたため、黄岩は韓東周を刀で切ってしまう。また、残りの隊員たちも自首せず、ついに殺されてしまうのだ。

黄岩と孫芝恵は、投降後に夫婦生活をしていたが、黄岩が殺人罪で起訴されると、梁達秀が孫芝恵を自分のものにした。黄岩は殺人とパルチザン幫助で死刑判決を受ける。（上告審で無期刑）その時の検察官が金重燁だった。これは、梁達秀が孫芝恵の身体と財産を奪い取るために、韓東周が生きているのにもかかわらず、邪魔な黄岩を消すためにでっち上げた事件だった。

呉炳鍋は孫芝恵に会いにソウルへ向かおうとするが、住所を知らないため、杳蓮と恋仲の朴振泰から情報を得ようとする。杳蓮は修道女となっていたのだ。やがて呉炳鍋は、ソウル清溪川の飲み屋で女給をしている孫芝恵と面会する。彼女から、泰栄が尚原にいる黄岩の姉の家にあずけられているという話を聞き、そちらを訪ねるが泰栄はすでにいなかった。彼は父と再会して真相を知るや、金禹植と名をかえてソウルに潜伏していたのだ。また、韓東周が本当に殺され

ていたのかを確認しようとした呉炳鍋は、逆に韓東周の一派に命をねらわれる。過って一人を殺してしまった呉炳鍋は、今度は追われる立場としてソウルに上京した。韓東周は生きており、北朝鮮のスパイとして暗躍していたのだ。呉炳鍋は韓東周一派と対決し、これを倒すが、その一方で黄岩と孫芝恵が自殺をする。黄泰栄の犯した二つの殺人は、自分がやったことだと遺書にしたため、罪をかぶって死んだのだ。すべてがおわった今、呉炳鍋も自殺する*。

これが金聖鐘の第一の作品と呼び声高い小説の梗概である。一読すればわかるとおり、あくまでも北朝鮮は悪であり、そこにかかわってしまった人が悲劇に見舞われるという構造をもっている。当時、民主化のために闘っていた文化人たちとは一線を画するものだといえる。「最後の証人」が書かれた一九七四年の時点で金聖鐘は三三才。維新体制（第四共和国）と呼ばれる朴正熙政権がいよいよ独裁の度合いを極端にした体制が発足したのが一九七二年であることを考えると、彼の小説は時代の空気を敏感に反映し、広範な読者にそれを伝えていくという「プロバガンダ」の側面さえもっているといえまいか。維新体制でも三〇代の若い力が強く要求され、全国に展開された「セマウル運動」*¹⁰でも、地域のリーダーは若い世代、まさに金聖鐘とその読者の世代だった。この時代的な背景と彼の受け入れられ方、これが金聖鐘の立ち位置であり、ここをおろそかにしてはならないだろう。

ちなみに、先ほど世代の問題を語ったが、これは次のようなことである。まず、金聖鐘の年齢は、現在六〇代の前半である。韓国で「六〇代」といえば、青年時代に「歴史的な事件」を体験しているという特徴を持つ。「四・一九学生革命」(一九六〇年四月に李承晩^{イ・スンマン}大統領を下野させた運動。学生が主要な役

割を演じたためこう呼ばれる)である。

金聖鐘は一九四一年生まれであるから、「四・一九学生革命」当時、彼は数えて二〇才にあたる。「四・一九学生革命」を二〇代で(学生として)経験したことになる。さらにこの「世代」について考えてみよう。「四・一九学生革命」とともに、現代韓国においてもうひとつの大きな歴史的な事件があるとすれば、「光州事件」(一九八〇年)があげられる。もちろん他にも大きな事件はあるのだが、この二つは韓国の構造そのものに与えた影響の度合がもつとも大きいのだ。この二つの事件は朴正熙が実権を掌握した「五・一六軍事クーデター」(一九六一)年から暗殺されるまで(一九七九年)の前後にあたる時期に起きた出来事である。そして六〇代の人々は、次のような傾向を持つとされる。

(軍事クーデターで成立した一筆者) 政権の正統性をめぐって、体制と反体制の葛藤関係がくり返された朴政権下での二〇年だった。だが同時に、それは韓国が「上からの近代化」によって、めざましい経済成長をとげた歴史でもある。そうしたなか、かつて四・一九を担った若者たちは働きざかり、分別ざかりの三〇代、四〇代となり、今度は産業化への牽引役を担わされることになったのである。(中略)(この世代は一筆者) 目標志向的、出世志向的かつ機能主義的な、この世代特有の性向をあらわしている。また五〇代は、自由主義的傾向を強く示す三〇代に対し、積極的保守性の傾向が強いともいわれる。(真鍋祐子『光州事件で読む現代韓国』、平凡社、二〇〇〇年)

これに対して「光州事件」以降の民主化運動を担い、ついには一九八七年の

「民主化宣言」を勝ち取った一九六〇年代生まれの人々(現在四〇前後)は「既存の体制に異を唱えて挑戦し、これを『徹天之怨讐』(不俱戴天之敵)とまで指弾してきた。すなわち、もてる者への敵愾心ともたざる者への罪意識、資本主義に対する懐疑や反米感情などが、日常的次元での共感帯を形成していたのである」。何故そうなったのだろうか。

朴大統領暗殺(一九七九年一月二六日)以後、急転直下の価値の転換・喪失によって、「血の凍るような背信感と、今まで嘘を子供たちに注入してきた既成世代に対する怒り」に身もだえる体験を共有している。それは学校教育のなかで知識として注入され、過酷な受験競争を勝ちぬくために骨身を削って覚えこんだ、正史にもとづく価値体系である。けれども一夜にして体制が瓦解したとき、あの昨日まで正しいと信じこまされてきたことからは何だったのか、という虚脱感と徒労感が彼らを覆いつくしたにちがいない。(真鍋祐子、前掲書)

もちろん、保守的な四〇代もいるだろうし、革新的な六〇代もいるだろうか。一概にはいえないだろうが、全体的な傾向という意味では現代韓国を知っている手がかりになるだろう。少なくとも、朴正熙政権という一九六一年から一九七九年までの長い時代の前後に、韓国社会が「四・一九学生革命」と「光州事件」という大きな峠を越えていることは確かだし、その時に青年時代を過ごした人々は共通の歴史認識を持っているというのもうなずける話ではないか。

最近では定説のようになりつつあるが、韓国経済の成長は朴正熙に負うところが多いとされる。政治経済、国際関係論などと無縁の筆者には、この真偽を

問う力はない。しかし、ありふれて「開発独裁」と呼ばれる彼の時代は「セマウル運動」という国民動員型の政策がとられており、国民は「貧困を克服すべく、『和氣あいあい』とした生活を営むべく』それに積極的に参加していったという事実をここで喚起したい。(拙論「韓国『建国理念』の文学的展開―『南韓』文壇のイデオロギー統一と金東里」、『現代思想』二〇〇〇年三月) 現在六〇代となっている世代Ⅱ「四・一九世代」は、その最前線として闘ってきたからだ。逆にいえば、この世代の人々は社会のほとんど国是だといってもいい経済発展に寄与しなければならず、報酬よりも精神的満足で彼らの労働は購われていったのだ。

四〇前後の世代の場合は、このような経験がないかわり、「光州事件」に直接関係しなかった、生き残ってしまったという「罪意識」があるといっている。だからといって、彼らの全部が全部体制に批判的かということ、そう単純にはいえない。一九九七年の経済破綻を前後して、韓国の若い世代に朴正熙を英雄化する動きもあるからだ。おそらくは不況の波にのまれながら、韓国近代化の父といえる朴正熙にノスタルジーを感じ始めているのではないだろうか。

金聖鐘に話を戻せば、このような六〇代に彼は属しているのである。彼らは革命を成し遂げたあと、韓国発展のために朴正熙政権の支え手としてもっとも期待された世代でもあり、現実にも期待に応え続けた保守的な世代である。少なくとも、当時の平均的読者層は、これに反発するものではなかったのだ。一九七〇年代に金聖鐘を読み、それを支持した世代、それは当時働き盛りだった三〇代から四〇代までのひとびと、つまり一九四〇年前後に生まれた世代だった。金聖鐘が戦争の悲劇を描いても、官僚構造や権力構造のもつ影の部分に批判を入れなかったのは、このような保守的な思想(時代の思想)を受け入れ

たことによるのかもしれない。

2 松本清張と金聖鐘

松本清張のミステリはありふれて「社会派ミステリ」と呼ばれる。この社会派なる流派が定着したのは松本清張の功績だとされているし、一定の意味があったと思われる。しかし、近年この「社会派」が日本ミステリの主役の座から落ちつつある。「新本格派」と呼ばれる若いミステリ作家による「本格ミステリ」の展開がそれだ。たとえば、「新本格派」の中心人物のひとり目される綾辻行人は、デビュー作「十角館の殺人」のなかで、登場人物に次のようなことをいわせている。

「僕にとって推理小説は、あくまでも知的な遊びの一つなんだ。小説という形式をつかった、読者対名探偵、読者対作者の刺激的な論理の遊び。それ以上でも以下でもない。

だから、一時期日本でもはやされた「社会派」式のリアリズム云々は、もうまっぴらなわけさ。1DKのマンションでOLが殺されて、靴底を擦り減らした刑事が苦心の末、愛人だった上司を捕まえる。いやめてほしいね。汚職だの政界の内幕だの、現代社会の歪みが生んだ悲劇だの、その辺も願い下げだ。ミステリにふさわしいのは、時代遅れと云われようが何だろうが、やっぱりね、名探偵、大邸宅、怪しげな住人たち、血みどろの惨劇、不可能犯罪、破天荒な大トリック……。絵空事で大いに結構。要はその世界の中で楽しめればいいのさ。但し、あくまで知的に、ね」「十角館の

殺人」、一〇頁。講談社文庫、一九九一年)

この小説が上梓されたのが一九八七年のことで、いわゆる「新本格派」と呼ばれる作家たちが陸続と登場するきっかけになった。だからこの言葉は、単なる登場人物の性格を表すだけでない、「新本格派」の宣言とでもいうべき内容になっている。

さて、ここで攻撃されている「社会派」とは、具体的にどのような作品、作家を指しているのだろうか。上の文章を細かく分析すると、1ミステリの定義、2社会派の批判（具体的な作風をとりあげる）、3知的な楽しみを全うするためのミステリの要件の三つに分かれるだろう。1と3に関しては、「新本格派」あるいは綾辻氏自身の作品の自己規定と比べていいのだが、その間にある2が問題になる。

2の部分、具体的には「だから、一時期日本でもはやされた「社会派」式のリアリズム云々は」にはじまり、「現代社会の歪みが生んだ悲劇だの、その辺も願い下げだ」の部分だが、ここも細かく分けると前半と後半に微妙な差がみてとれる。前半は「1DKのマンションでOLが殺されて、靴底を擦り減らした刑事が苦心の末、愛人だった上司を捕まえる」と云う「不倫」にまつわる「社会派」の作品を指しているのだろう。そして後半は「汚職だの政界の内幕だの、現代社会の歪みが生んだ悲劇だの、その辺も願い下げだ」というように、権力構造の問題とそれに押しつぶされる人間の悲劇、そこから派生する殺人事件を扱った作品を指しているわけだ。

ところで、この前半と後半はずいぶんと意味合い、もっとうってしまえばレベルが違うものだといえまいか。綾辻氏自身もそれはよく了解しているようで、

前半については「やめてほしいね」と吐き捨てるのに対し、後半に関しては「その辺も願ひ下げだ」という具合に、批判の度合いに濃淡を付けている。少なくとも後半にあげたような小説に対しては、彼自身は創作態度としてえらばないが、それほど「やめてほしい」とは思っていないのではないか。

筆者がこの文章を読んだとき、ある「社会派」笠井氏は「社会犯罪小説」というと目される作家が浮かんだ。それは前半の部分により強く意識されているように思える。それが森村誠一だ。周知のように綾辻氏もかなり才能のある作家だ。彼がデビュー小説とはいえ、二流の作家を攻撃するとは思えない。だいたい、松本清張をして「社会派」とくくることが自体に問題を感じるのだが、それはさておこう。主敵として綾辻氏がえらんだのはある意味で「社会派」の大物といえるような作家として森村氏であったのではないかと類推されるのだ。

現実に森村氏の小説を再読すると、実に多くの小説で「不倫」を筆頭に「情痴のもつれ」が事件の原因になっている。たとえば彼の代表作のひとつと云うといい、日本推理作家協会賞受賞作の『腐食の構造』は、良心に悩む原子力学者雨村が失踪し、死亡するのだが、その失踪の原因は「不倫」関係であった。この小説が構造汚職を扱う「社会派」の王道をいっている小説だけに、事件の原因が「不倫」であったというのは正直いって興ざめである。このような殺人の「理由」は、江戸川乱歩賞受賞作である『高層の死角』以来、最近作の『笹の墓標』まで一貫している。森村氏はなぜ「社会構造の暗部」をテーマにしながら、実際の事件＝情痴のもつれを絡ませるのだろうか。これについては、次のような話がある。

写真とともに丁寧な礼状をいただいた日から数日後だったろうか、森村さんから私に電話があった。朱鞠内で起きた出来事をテーマにした小説を書きたい、については資料を入手したので協力してもらえないか。推理小説にしたい、その方が殿平さんたちのやってきた活動を多くの人に伝えやすいだろうともいわれた。(『笹の墓標』解説(殿平善彦)、三六〇頁。光文社文庫、二〇〇三年)

この小説は朱鞠内という北海道の町で、かつての朝鮮人による炭坑労働の歴史を掘り起こし、その遺骨を発掘するというワークショップに参加した森村氏が、そのワークショップをリードする殿平氏とのあいだに交わした話である。もちろん、これ自体を批判しているのではないが、注目したいのは「推理小説にしたい、その方が殿平さんたちのやってきた活動を多くの人に伝えやすいだろう」という部分だ。森村氏はもともと『大都会』のような「社会」小説を書いていた。しかしそれでは多くの読者をえられないと考え、江戸川乱歩賞に応募することになる。まさに、本当に描きたいのは構造汚職だったり、北海道の戦前の炭坑労働だったりするのだろうが、それでは多くの読者がえられないから「推理小説にしたい」と考えるのだろう。

先に「情痴のもつれ」という言葉を使ったが、彼の最高のヒット作である「人間の証明」の場合、そのような「情痴のもつれ」が犯罪を引き起こす原因としてはいいないが、戦後直後に黒人米兵の子どもを身ごもっていたという「秘密」が政治家の妻であり本人も社会的地位をもっていた八杉恭子が殺人を犯す根拠となっているわけだから、その延長線上にあるともいえる。森村氏は、このような「情痴のもつれ」をどうして作品に必ず登場させるのだろうか。それはも

ともとは書きたいことがあって、それを表現するときに「推理小説」という枠組みを利用しているからではないのだろうか。ちょうど『笹の墓標』でそうだったように、その方が読者をええやすいと考えて。

筆者がここで森村誠一について長々と語るのにはそれなりに理由がある。第一には、森村誠一が韓国でもっとも受け入れられている日本の推理小説作家であるということ、第二にそのミステリという形式を選択する仕方が、韓国のミステリおよびミステリ研究をみる上でとても参考になるからだ。

まず、第一の問題について考えてみよう。前出の『金聖鐘を読む』には次のような一節がある。

私は我が国の推理小説(?)が成功するための文体を二種類あるとみているのだが(能力の限界のためいままでそれ以外の文体を考えてみたことがない)、いうまでもなく金聖鐘氏が積み上げてきた金字塔がそのひとつであり、もうひとつは日本の推理作家森村誠一の叙述方式だと考える。

若い作家の不幸は、このふたつがともに両氏によって完全に消耗されてしまっているという点にある。(前掲書、四二頁)

韓国でもっとも人気のある日本の推理小説作家は森村誠一だといわれている。それは上の文章からも垣間見ることができよう。どうしてだろうか。まずは、森村氏のデビュー時期ということがあげられるだろう。

韓国で日本語日本文学を積極的に研究教育しようという機運は、一九五〇年代までは皆無といい状態だった。その原因は植民地統治の傷跡というものであり、徹底した反日主義者の李承晩大統領(一九四八年〜一九六〇年まで

在位)の教育政策にも求められるだろう。これが日本語教育が必要であるという態度に変わるのは、先にも述べた「四・一九学生革命(一九六〇年)のあとのことだ。最初の日本語学科の設置は韓国外国語大学によるもので、一九六一年のことであった。もちろん、いまのような日本語ブームなど考えられないような状態ではあっても、必要な言語として日本語が認識されたのはこの時がはじめてということになる。その後、朴正熙政権下で国際大学(後に崇実大学校に吸収)などいくつかの大学が日本語学科や日本語日本文学科を設置している。もちろん数えるほどしかなく、これが爆発的に増えるのが一九八〇年代の後半を待たなければならぬのだが、それはさておこう。日本の文学作品が紹介されるような余地は、少なくとも一九六〇年代まではほとんどなく、ましてやミステリが翻訳されるなどかなり難しいことだった。韓国の文学環境が「純文学」を愛する風土であることも忘れてはなるまい。また、一九六〇年代といえはまだ解放後(戦後)二十年しか経っておらず、四〇歳以上の知識人なら楽に日本語の小説を読めるわけで、翻訳の必要性はむしろ若い世代にあったということもあげられる。若い世代に教育的な意味を込めて翻訳する、しかもそれを担当するのは「親日派」というレッテルを受けながらも信念を持って日本語日本文学を研究する学者たちなのだ。江戸川乱歩や夢野久作が翻訳されるのは、どうしても後回しになってしまう。そんなとき、一九七四年に金聖鐘がミステリ作家としてデビューした。これはサラリーマンらの読者層が成長したことも意味するし、また購買力が上がってきていることも勘案する必要がある。一九八〇年代、ソウルオリンピックを控えて「漢江の奇跡」と呼ばれる経済発展をし、ニーズ(アジアの新興経済発展地域。韓国、台湾、香港、シンガポール)の優等生と賞賛されるまであと一步のところだったのだから。そのとき、日本のミ

ステリが紹介された。それはもちろん流行作家がえらばれる。当時は松本清張も高い人気を誇っていたが、一九三〇年代後半に生まれた森村誠一は当時まだ三〇代で、世代的には金聖鐘とほぼ同じ年代である。読者層もほぼそれぐらいの年齢であったことを考えると、森村が選択されたのは当然の帰結だったかもしれない。かくて、一九七〇年代、金聖鐘によって拡大されたミステリマーケットに、日本を代表する作家として森村誠一が参入し、高い評価を受けたのだ。

では、もうひとつの問題についてもみてみよう。それは引用文献で「文体」叙述方式」と表現されているものだ。これについては、チョン・ヒモ氏の「推理技法の変容、叙事化の可能性—金聖鐘の『最後の証人』にあらわれた推理技法を中心に」から引用してみよう。

しかし、そうであってもこの作品が同時代の別の作家の作品である『夕焼け』や『スニおじさん』のように、戦争による人間個人の内面的傷を治癒したり、あるいは現実的和解をはかったり、過去に対する歴史的反省を盛り込んだ小説ではない。『最後の証人』はどこまでも推理小説であり、個人の悲劇から歴史の悲劇へと上昇する過程を、過去の秘密を暴く推理の作業を通してなされるからだ。要するに個人の生を決定する歴史的悲劇に対する推理的追跡様式が、この小説の方法的原理を貫いており、このような形式は悲劇的な歴史との治癒や和解よりも個人と歴史に対する複雑な因果関係を生の形成的原理としてあらわしてくれているということだ。そのような点でこの小説は一方では犯人を捕まえるための推理小説となり、もう一方では生の根元におかれている因果関係の複雑性と悲劇性を表す本格小

説となりもする。(『推理小説とは何か?』二〇五頁。国学資料院、一九九七年)

ここでいう「本格小説」とは、「本格推理」のことではなく、いわゆる「純文学」を指す。題名からみても分かる通り、この論文が載っている研究書は推理小説についての専門書であり、おそらくは韓国で最初の本格的な推理小説研究書でもある。それにもかかわらず、『最後の証人』は「犯人を捕まえるための推理小説」だけでなく「戦争による人間個人の内面的傷」を描くことで「生の根元におかれている因果関係の複雑性と悲劇性」を表すから「純文学」的な小説として評価できる、というような、明らかに「純文学」の劣位に推理小説をおいていることがわかる。かなり悲しいことだが、このぐらい韓国では「純文学」なるもの(あるいは文学研究の権威主義)が概念として生きてしまっているのだ*11。

ここからみえてくるのは、金聖鐘の代表作である『最後の証人』は、「純文学」的にも評価できる内容を含んでいるから評価できる、という歪んだ評価だけではない。ペク・ヒュー氏の引用にあった「我が国の推理小説(?)」が成功するための文体を二種類(＝金聖鐘と森村誠一)あるとみていることともかわつてくると考える。そのことをみるために、まずは松本清張氏が「社会派」といわれていること、そしてその内容について考えた上で解答することしよう。

笠井潔氏は、『探偵小説論Ⅰ—氾濫の形式』(東京創元社、一九九八年)のなかで、次のように語る。

探偵小説ジャンルそれ自体が、「戦後」という刻印を深々と押されたものとして存在しているのである。

もちろんそれは、新石器時代から一万年ものあいだ、われわれ人類が飽きることなく繰り返してきた戦争一般の、一般的な「あと」を意味するものではない。探偵小説において問題になるのは、第一次世界大戦という人類最初の世界戦争と、その戦後である。「グレート・ウォー」と命名された絶対戦争の経験を土壤としてのみ、探偵小説ジャンルは発生し確立された。(前掲書、五四頁)

大量死が文学に影を落とす。たとえば、ひとつの殺人事件を隠蔽するためだけのために連続殺人を行うなど(アガサ・クリステイ『ABC殺人事件』)その典型だろうか。このような「戦後探偵小説」が、日本では「世界戦争」Ⅱ「絶対戦争」を実質的に体験した第二次世界大戦後に展開したというのが笠井氏の議論であり、筆者もこれに賛同する。そして、笠井氏は松本清張に触れて次のようにも述べるのだ。

〔点と線〕の 亮子は(鮎川哲也著『黒い白鳥』の文江とは異なって、戦争の過去に直結した、作中で戦争の過去を象徴するようなキャラクターではない。平和な現在の日常性と背反せざるをえない、禍々しい過去との関係を暗示する要素は、回復の見込みがない結核患者という設定につきる。長年のあいだ、不治の病として日本人を脅かしてきた結核だが、米占領軍が持ち込んできた抗生物質の効力で、その脅威は急速に低下した。『点と線』の背景をなしているのは、栄養状態や医療体制が改善され、抗生物質

が普及した時代である。この時代に、医師から「はつきりいつて全治の見込みは薄い」と宣告されている播種性肺結核症の患者。それは一九五〇年代後半の、平和な日本社会に喰い込んだ異物にはかならない。不治の病を病んだ患者とは、繁栄を謳歌する現在に過去から侵入した、戦争と社会的混乱の医学的メタファーである。

身体的あるいは精神的欠損を抱えた人物や、才能と境遇の落差に悩む人物が劣弱感やルサンチマンの代償として過剰な観念を紡ぎだし、おのれの観念の重圧に押し潰されて破滅するという主題の短編作品が、初期清張には幾編もある。デビュー作の「或る『小倉日記』伝」をはじめ、「菊枕」や「断碑」など。(中略)

初期清張が執着していた、(或る『小倉日記』伝)の 耕作の人生に象徴される空虚と悲痛の主題性。「或る『小倉日記』伝」に代表される初期短編は、現実的喪失の観念的回復という普遍的テーマを清張風に変奏した、マイナーな秀作として評価されるに過ぎない。この主題を、戦後探偵小説の問題圏に方法的に導入した瞬間、清張の獨創性は他に類例を見ないものとして華々しく開花したというべきだろう。(中略)

耕作は「壊れた人間」である。そして清張は、耕作の分身として亮子を創造した。戦後探偵小説の問題圏に置きなおされた「壊れた人間」のキャラクターは、初期清張が固執した、不遇な才能の空虚と悲痛という抽象性を越え、二〇世紀的に荒々しい具体性を獲得する。「壊れた人間」亮子は、大量死をとげた無数の二〇世紀人の存在を象徴しているのだ。(前掲書、二一六―二一八頁)

松本清張は明らかに「戦後探偵小説」の作家としてデビューしたのであり、「点と線」から『ゼロの焦点』に至る作品は、それを雄弁に語っている。それは、「平穏な日常」に侵入して行く「過去の戦争の記憶」が、事件を引き起こしてしまふという問題設定だ。彼を「社会派」の始祖として規定してしまふと、この性格がこぼれ落ちてしまふ。

しかしながら、日本の「戦後探偵小説」は終わりを告げようとしていた。それは「もはや戦後ではない」という発展していく日本のなかで、「戦後」そのものが「切断／転向」(ポール・リクール)されていくことで、「戦後探偵小説」がリアリティを失っていくわけである。この「戦後探偵小説」の不可能性のなかで、松本清張は「壊れた人間」を通じて『点と線』『ゼロの焦点』といった終末期の「戦後探偵小説」を発表していった。いみじくも笠井氏がいうとおり、「事実として戦後探偵小説の可能性は、『ゼロの焦点』で汲みつくされた。その彼方にはもはや二つの方向しか残されていない」。それは「第一に、探偵小説形式を社会犯罪小説に無自覚的に解体する方向。第二に、探偵小説形式的方法的な自己解体を追求する方向」といえよう。

ここまで長々と笠井氏の議論を援用しながら語ってきたのは、このような松本清張の「戦後探偵小説」としての位置を確認すると、自ずと金聖鐘の位置がみえてくるからだ。先に引用したベク・ヒュー氏の文章で、韓国のミステリにはふたつの文体しかなく、それが第一に金聖鐘であり、第二に森村誠一だであった。ここから韓国ミステリのなかでの日本の影響を見るだけでは不十分だろう。金聖鐘の特殊性をみなければなるまい。

前章に紹介したように、『最後の証人』は、朝鮮戦争での悲劇を引きずって

いる。それは作品のキーパーソンと云っていい黄岩の立場からも明らかだろう。

「あ、あの、お若い人…ちよっとお尋ねします」

そのときになってやっと青年は、このむさ苦しい風体の老人を警戒する眼でながめた。

「なんでしょうか？」

「あのう、すみませんけど、動乱があつてから、何年になるでしょうか？」

「動乱ですって？」

青年は唇からたばこをはずしてから、それを指で高く弾いた。

「ええ、あの動乱です。戦争になっていた…」

「ああ、六・二五(朝鮮戦争)のことですね」

青年は間の抜けた老人に早く理解させる方法を探してもしているように

に、小さくも鋭くみえる眼を何度かしばいたからこういった。

「ええっと、ですから、六・二五戦争が一九五〇年六月二五日に起きて

…今日が一九七二年一月十日だから、年数としては二十二年ですよ」

「そんな、動乱が起きて二年後に監獄に入ったとすれば、何年が経つ

ているんでしょうか？」

「二〇年です」

といった青年は数字が実感できないのか口をぽっかりと開けたまま、黄岩をながめていた。

「二〇年といえば、もう…そんなら、オラの息子が生きていたら二〇歳になつてるっちゅうわけか。ああ、あなたのように大きくなつてるだろう

なあ(『最後の証人』、十八頁。太宗出版社、一九七七年)

この文章からわかるとおり、黄岩は朝鮮戦争を基準にしか考えられない人間であり、その分、朝鮮戦争が彼にとって大きな意味を持っていることを示している。朝鮮戦争は朝鮮半島をローラー式に破壊した、市民を巻き添えにした「絶対戦争」であり、米ソ対立をそのまま具体化した「世界戦争」であった。朝鮮半島には明らかに「世界戦争」が深く深く刻印されており、その刻印を具現化する人物として黄岩は描かれている。黄岩は朝鮮戦争を起点にしなければ年数を数えられない人間であり、それはとりもなおさず朝鮮戦争を基準にしなければものを考えられない人間が存在することをあらわす。そして、彼が出所したあと、彼が命がけで護ってきた孫芝恵の息子が、復讐としての殺人事件を起こしていく。そういった意味で、「過去の記憶」が「平和な現在」を揺すぶるといふ、松本清張の「戦後探偵小説」にみられた類型がここでもみられる。まさに「世界戦争」としての朝鮮戦争は、はっきりと「最後の証人」にあらわれているのだ。

要するに、金聖鐘のミステリは「戦後探偵小説」なのだ。それは韓国・朝鮮における「世界戦争」＝朝鮮戦争を色濃く反映したものにほかならない。そう、金聖鐘はジョン・ヒモ氏がいうように「生の根元におかれている因果関係の複雑性と悲劇性を表す」ために、ミステリという枠組みを利用したのではなく、彼が作品活動をする上で、否応なくその小説のなかに「世界戦争」が入り込んでしまったのであり、その「世界戦争」の文学としての「戦後探偵小説」という側面をもってしまったのだ。

このような立場から金聖鐘および韓国ミステリをみていくと、韓国ミステリの文体がふたつしかない、しかもそれが金聖鐘と森村誠一であるという意味がみえてくる。すなわち、金聖鐘が朝鮮戦争を淵源としたミステリを書いている

こと、しかもそれが一定の意味を持っていることを否定することはできない。それに対して、いままでは「生の根元」を描いた小説であり、ミステリの技法を応用したとみられていた。しかし、それは間違っている。先に述べたとおり、「最後の証人」執筆時の金聖鐘が「推理小説を書いている」という自覚を持っていたかどうかは疑わしい。むしろ、彼が書いている内容に「世界戦争」としての朝鮮戦争の実体が入り込んできたのではないか。そして、韓国で唯一の「戦後探偵小説」を成立させたのではないか。もしもこのような考え方が妥当なら、もうひとつの文体としてあげられている「森村誠一」も解きやすさろう。それは森村自身も陥っている「探偵小説形式を社会犯罪小説に無自覚的に解体する」＝「社会派」の文体（内容）だ。これはある意味で当たり前なのかもしれない。文学的必然としての「戦後探偵小説」というものと格闘している作家と、それに「無自覚」に社会的な問題を小説化する際にミステリの手法をちよつと借用する作家は、自ずと内容が違うのだ。これを身体で感じた韓国の読者は、韓国ミステリに金聖鐘＝「戦後探偵小説」と、それ以外（森村誠一）＝「無自覚な社会犯罪小説」というカテゴリーを構築したのだろう。

笠井潔氏はすでにみたように、松本清張は「戦後探偵小説」の不可能性なから、「戦後探偵小説」を描いた作家だと述べている。それに対して金聖鐘はどうだろうか。松本清張が「もはや戦後ではない」といわれた一九五〇年代後半にミステリを書いたのが偶然ではなく、よそよそしい、過去を「切断／転向」した「平和」に対する違和感から「点と線」や「ゼロの焦点」を書いたのだとすれば、やはり金聖鐘もそのような社会的背景があったのではないか。少なくとも筆者はこう考えている。金聖鐘が「最後の証人」を書いたのが一九七四年であり、その物語の発端が一九七二年であったというのは決して偶然ではない

と。

一九七二年は朴正熙政権が独裁の度合いを深め、事実上の永久大統領になった維新体制Ⅱ第四共和国成立の年である。一九七〇年代はこのようにして韓国で始まっているのだ。しかし、それは単に暗いだけの時代ではない。後に「漢江の奇跡」と讃えられる経済発展の基礎を築いた時期でもあり、それを熱狂的に支えたのが現在六〇代の世代、一九四〇年前後に生まれ、学生時代に一九六〇年の「四・一九学生革命」を経験した世代なのだ。彼らは祖国の発展に参与し、疑うことはなかった。しかし、一九七〇年を前後し不吉な影が韓国を被う。それは「ベトナム戦争」という暗雲だ。周知のように、韓国がいかに経済的に弱かったとしても、韓国軍が縁もゆかりもないベトナムに出兵し、その国を蹂躪したことはとうてい許すことはできない侵略行為である。しかもそれを国家の意思というよりアメリカからの要請と見返りの経済効果を期待しての「出稼ぎ侵略」だったことが、より深い影となっているのではないか。アメリカの対ベトナム敗戦が一九七五年のこと、もちろんその前から事実上敗北している。すると、『最後の証人』が書かれた時期には、韓国人はもうひとつの「世界戦争」Ⅱベトナム戦争を、しかも侵略者として、そして敗北者として経験したということになる。韓国にとって、「世界戦争」を文学シーンに読み込むことは、むしろ歴史的必然として要請されていたのではないか。もしも金聖鐘が『最後の証人』を書かなかったとしても、誰かが「世界戦争」の文学としての「戦後探偵小説」を書いたことだろう。それぐらい、一九七〇年代の韓国にとって、「戦後探偵小説」は必要とされていたのだ。

すでにみたように、松本清張はありふれて語られるように単なる「社会派」の作家ではなく、「戦後探偵小説」の書き手としてミステリに参入している。一

九五〇年代の日本では、これも必然だったのだろう。それと同様に、まさに日韓の文学のパラレルな関係として、一九七〇年代に「戦後探偵小説」を具現する作家が必要とされていた。金聖鐘が自分の書いている小説をはたしてミステリだと自覚していたか疑わしいと述べたが、その根拠はここにある。彼が書いたのは時代の要請に沿ったものであり、それを「生の根元」を描きたいがそれでは読者を惹きつけないからミステリの手法を使ったという、後の俗流「社会派」とは一線を画すものとして認識する必要があるのではないだろうか*12。

3 金聖鐘以後のミステリーむすびにかえて

以上のように、韓国で金聖鐘が他のミステリ作家と違うものとして扱われている理由、あるいは彼が松本清張と比較される理由がみえてくるだろう。では、松本清張亡き後の日本ミステリに「新本格派」という新しい波があらわれるように、韓国のミステリになにか新しい波はないのかという気になってくる。

たとえば、金聖鐘が単独で切り開いた韓国ミステリ(韓国の「戦後探偵小説」)は、後継者のいないまま「戦後」が遠のき、変質しているようだ。「戦後」が去った以上、あとに残る選択肢ふたつということになる。それが先述した「第一に、探偵小説形式を社会犯罪小説に無自覚的に解体する方向。第二に、探偵小説形式の方法的な自己解体を追求する方向」ということになる。第一については多くを語る必要もあるまいが、問題は第二である。この第二Ⅱ中井英夫氏の語る「アンチ・ミステリー」を志すような、高い水準のミステリが韓国にあるのだろうか。実は、あるのだ。それが、イ・インファ氏の『永遠の帝国』である。

まずはイ・インファのことに紹介してみよう。彼は一九六六年に慶尚道に生まれた。一九八九年にソウル大学校国文科を卒業し、そのままソウル大学校大学院国文科に進学した。本名は柳哲鈞リュ・テヨルギョといい、一九八八年に学部生ながら『文学と社会』誌で評論家としてデビューした。小説は一九九二年に『わたしは誰なのかいえるものは誰なのか』で「作家世界文学賞」を受賞、さらに二〇〇〇年には中編小説「詩人の星」で、韓国文学の世界で最も榮譽ある文学賞の一つである「李箱文学賞」に輝いている。また、研究者としても安定した地位を得ており、梨花女子大の教授として活躍している。

ここまで話すと、彼がひともうらやむようなエリートコースをまっすぐに進んできたことがわかるだろう。まさにイ・インファは、韓国の新世代を代表するインテリゲンチアだといつていい。

一章で述べた「世代」論を思い出してほしい。彼は明らかに四〇歳前後の世代に属する。つまり、金聖鐘の世代Ⅱ六〇代と真つ正面から対立する世代Ⅱ「四・一九世代」とは真つ向から反対する世代ということだ。金聖鐘の世代の人々は、社会のほとんど国是だといつてもいい経済発展に寄与しなければならず、報酬よりも精神的満足で彼らの労働は購われていった。それに対してイ・インファの世代Ⅱ四〇歳前後の場合は、このような経験がないかわり、やはり韓国現代史における大きな事件である「光州事件」を間近でみ、しかも直接関係しなかった、生き残ってしまったという「罪意識」があるといつていい。だからといって、彼らの全部が全部体制に批判的かという点、そう単純にはいえない。一九九七年の経済破綻を前後して、韓国の若い世代に朴正熙を英雄化する動きもあるからだ。おそらくは不況の波にのまれながら、韓国近代化の父といえる朴正熙にノスタルジーを感じ始めているのではないだろうか。

それはさておこう。上にあるようなイ・インファの世代Ⅱ四〇歳前後の世代は、「光州事件」を通過した世代であるといつていい。しかし、それは大まかに二つ。「緊急措置世代」と、その後の民主化運動を主導した世代Ⅰにわけられる。前者は大学時代に「光州事件」を経験しており、大学が閉鎖されるなどの直接体験をともなつた記憶がある世代だ。それに対して後者は、「光州事件」当時はまだ幼く、むしろその「不参加」の記憶が「罪の意識」として残り、あらためて民主化運動に向かった世代だといつていい。

イ・インファの属するのはむしろ後者なのだが、彼が「民主化の闘志」であったかどうかなど、そんなにたいした問題ではないだろうと考えている。同じ世代の人間が、すべて同じ思想を持つということはありえない以上、世代論というものも大きな枠組みである一定の世代の人間なら全員に当てはまるといえる。最小公倍数的なものの考え方や行動様式を汲み出していく作業をすることで、はじめて有効性が出てくると信じるからだ。

ところで、「光州事件」前後の韓国社会の動きとはどういうものだったのだろうか。ここで、少しおさらいをしておこう。前述のように、朴正熙は事実上永久大統領となり、まさに「上からの革命」が、これによって制度化される。このような独裁的な体制が、朴正熙体制を底辺から支えてきた国民に人権意識を覚醒させる。学生・言論人・労働者・宗教家などは、これに対抗すべく野党と結びついて「下からの改革」を標榜する反体制派の流れをつくりだしたという。(真鍋祐子、前掲書) もちろん真鍋氏のいうように、このような反体制の流れが急速に力を増していった理由には、朴正熙の独裁化に対する反発という側面もあるだろう。しかし、やはり第一次オイル・ショック、第二次オイル・ショックという波のなかで経済開発が減速し、雇用が不安定になっていったとい

う面も見逃してはなるまい。そして、YH事件を機に反体制運動は大いに盛り上がっていくのだ。

この「YH事件」とは、YH貿易会社の女子労働者一七〇人が、一九七九年八月に野党・新民党（金泳三総裁）の党舎に籠城した際、踏み込んできた機動警察と乱闘となり、金景淑という女性が窓から墜落死するというものだった。この後、十月十八日には釜山と馬山（ともに慶尚道）で強権政治に抗議する人々の一斉蜂起が起きた（釜馬事態）。朴正熙政権はこれを押さえられず、ついに朴正熙の腹心でKCIA部長であった金載圭は、朴正熙を暗殺してしまふ（十月二十六日、翌日には非常戒厳令がしかれる）*13。

大統領を失った韓国は、迷走をはじめた。その時、三人の政治家が大統領候補として立つ。すなわち、野党の金大中、金泳三、そしてかつて朴正熙の腹心だった金鐘泌の三人だ。これが後にいう「三金レース」の始まりである*14。

しかし、十二月十二日に全斗煥、盧泰愚の二人（相次いで大統領となる）が中心となる「新軍部」が軍部を掌握（十二・十二粛軍クーデター）、その頂点にいる全斗煥が全権を握るや、金泳三と金鐘泌の二人はレースから離脱する。しかし、金大中は一九八〇年五月に軍に連行され（九月には死刑判決を受ける）、もともと冷遇されてきた全羅道の人々の闘争は激化する。金大中は全羅道出身であり、かつ朴正熙政権の経済開発では慶尚道（朴正熙の地元）が優遇されてきたため、全羅道の人々の不満は頂点に達していたのだ。

一九八〇年五月十八日、金大中釈放を求める大規模な学生デモが光州市で開かれ、やがて軍部と対立、市民は武器をとって対峙するが、全斗煥率いる「新軍部」はこれに軍事弾圧をもって報いる。同年七月の戒厳司令部発表では、犠牲者は一八九人とされるが、民間サイドでは「二千人」とも「三千人」ともい

われている。（光州事件）（服部民夫『韓国インターネットと政治文化』、東大出版会、一九九二年）

全斗煥はこの年の九月一日に大統領に就任するのだが、それから先のことは今回は細かく説明するいとまはない。ここでは、一九七九年八月から一九八〇年九月までの約一年の間に、韓国が大きく動揺していたこと、そして指導者が暗殺され、新しい指導者が軍事力を背景に立ったということをおさえてくれればよい。この「光州事件」前後の戒厳令下に大学生活を体験した世代を、そのあとの世代（一九八七年民主化闘争を主導した世代）*15と区別して「緊急措置世代」と呼ぶということを知ることにとどめよう。

イ・インファはもちろん「緊急措置世代」ではない、「そのあとの世代」だ。彼がどのような歴史認識を持っているか、まず少しみてみよう。今回扱う『永遠の帝国』に、朴正熙政権の影をみることができるところだ。彼は「永遠の帝国」のなかで、次のようなことをいっている。

（王直属の軍を使って、勢力を張る貴族を除去するという噂に対して）維新！ついに朝鮮王朝は天命を維新するのだ。（中略）これから、大きな変化が訪れるだろう。この間、私利私欲と蓄財に目がくらんでいた特権階級たちは、ひとり残らず肅正され、いかなる身分差別も撤廃された新しい世の中が到来するだろう。

わが国は「進歩的」な立憲政治を築き上げることができなかったから滅びたのではなく、「弘齋維新」すなわち正祖の絶対王政を樹立するあたわずして滅びたのだ。

後進的な事件からがんばって自主的な民族国家を樹立したすべての国は、絶対主義国家の時期を通過した。(中略) 弘齋維新が失敗したことによって、我が民族の歴史は一六〇年ほども後退した。われわれ韓国人の不幸は、正祖の弘齋維新のかわりに、朴正熙の十月維新を経験しなければならなかったという事実だ。それこそ、勧められた酒を断つて罰の酒を受けたのであり、賢明なる王の法が支配する絶対王政のかわりに、粗野で残酷な開発独裁政権を経験したのだ。

ここにイ・インファの朴正熙政権に対する評価を知ることができる。そこにあるのは「全的」な英雄化ではなく、近代国家建設の条件としての「絶対王政」であり、朝鮮ではそれができなかったがために、朴正熙の「粗野で残酷な」開発独裁政権を経験せざるをえなくなったというものだ。しかし、逆にいうと朴正熙政権は、近代化の「必須条件」として数えられているのであり、乱暴さに対する非難はあれど、間接的にその存在意義を評価している。朴正熙は「賢明なる王」＝正祖に比されているのだから。

そして、その「維新」でできた政権は、「私利私欲と蓄財に目がくらんでいた特権階級」を否定した、「いかなる身分差別も撤廃された新しい世の中」をつくることが予定されている。朴正熙の政策は、その「プロセス」こそ「粗野で残酷」だと評されるが、その実は近代化の父としての朴正熙像と重なり合うものだといえよう。

彼は朴正熙政権の「維新」を近代化をする上で致し方のないもの、あるいは必然的なものととらえていた。しかし、右のように考えてみると、朴正熙政権とは冷戦構造によって「世界戦争」が未完のまま継続させられている朝鮮半島

の政治環境の下に生まれた「総動員体制」とみるべきだろう。イ・インファの意見も、朴正熙の「維新体制」が「歴史によって、表舞台に登場させられた」ものとしてとらえており、それはおそらく間違っていないのだが、「絶対主義国家の時期を通過」しなければならぬという根拠のない議論に結びついていくことは、注意が必要だ。なるほど、朴正熙は「登場させられた」人物だろう。そういった意味で、彼は独立変数としての政治的アクターとはいえない。彼がどんなに有能で冷静な現実主義的政治家だったとしても、金日成と同じく冷戦構造によって呼び起こされた政治家であることだけは間違いないのだから。

如上、イ・インファの歴史認識のズレを明らかにしてみた。彼は「光州事件」の時に、まだ十四才の中学生だった。既に紹介した「緊急措置世代」とは少し離れた世代だといえよう。「光州事件」に罪の意識を感じつづけ、光州を巡礼することで自己更新をはかるひとびとは違い、彼はあたかも「それはノスタルジーにすぎないのだ」とでも言いたげな、鼻持ちならない若きインテリの姿がそこに浮かび上がる。彼は豊富な韓国史の知識を披露しながら、「冷静に判断したら、朴正熙政権は韓国にとって歴史的に必要な時代だったんだ、もちろんそれは『不幸な罰の酒』ではあったんだけど……』という。

ここで再三登場している『永遠の帝国』という小説について触れてみよう。それは次のような骨組みの作品だ。

この小説の作者であるイ・インファは、東京の東洋文庫で資料をあさっているとき、『聚星録』という奇妙な本を見つける。李氏朝鮮の正祖時代について書かれたこの本は、正史に書かれていないおどろくべき内容だった。しかし、その著者とされる李人夢という人物は歴史上存在しないため、発表をためらわ

れたが、小説として発表するなら問題はないだろうと思ひ、筆をとる。

正祖二十四年（一八〇〇年）一月十九日の朝、奎章閣待教という役職にある李人夢が目覚めると、同じく奎章閣の検書官たる張鐘午が死んでいるという報告を受ける。死体の傍らには「詩経浅見録考」という帳面が転がっていた。奎章閣とは、李氏朝鮮の書籍・文書を保管した官庁で、国王の正祖が命名したものだ。李人夢はすぐさま内侍の鄭春教に話をし、直接正祖に事の次第を告げる。正祖は鄭春教に、張鐘午に捜すようにいっておいた、先代の王・英祖が残した『詩経』についての御筆『詩経浅見録』を見つけた様子という。実はこの日は、正祖の「親臨試講」が開かれ、王が自ら自分と対立する老論僻派と呼ばれる両班のグループを相手に講義をする予定であったのだ。正祖は文武両道に秀でた王で、外戚や勢力を張っていた両班を排除し、王権を強化することに努めており、奎章閣も王権の強化のためにつくられた官庁であった。

正祖が『詩経浅見録』を捜すように命じたため、李人夢は張鐘午の死体の側に「詩経浅見録考」という帳面があったことを思ひ出すが、既にそれはなくなっていた。張鐘午の死が他殺の可能性がでてくる。しかし、その「詩経浅見録考」に登場する「梟」の意味は何なのだろうか。そして、正祖を批判し、李人夢の行動を妨害しようとした鄭春教も何者かに殺されてしまう。

正祖が夢見ているのは、彼が讓位して、直接、勢道家たちを排除することであると噂されており、そのために奎章閣や新しい軍隊まで創設されている。これを「弘齋維新」という。すると、いままで勢力を持っていたグループは、生き残りをかけるために王と対立せざるをえない。正祖の父の思悼世子は、一七六二年に先代の王・英祖の櫃に閉じこめられて死んでおり、これが勢道家たちによる陰謀であったともいわれている。もともと、当時最大の党派であった

老論と呼ばれる両班グループも、先の思悼世子の死をめぐって、王に同情的な「老論時派」と、王と対立する「老論僻派」に分かれているのだが、まずはこの僻派を除き、最終的には党派的な対立をする両班政治を倒して、正祖による「絶対王政」を望んでいるのだ。

張鐘午の死を目撃し、正祖のリーダーシップを敬っている李人夢は、自宅を何者かに搜索されたり、果ては暴力を受けるようになる。彼は「老論」とは対立するグループである「南人」に属しているため、事件に巻き込まれたのだ。しかし、文献を探索するうちに、英祖にかかわる書物がいくつか発見され、そこに「梟」の文字を発見する。そして、英祖が自分の息子である思悼世子を失ったとき泣きながら「梟」という詩を詠んだことが記録から明らかになる。なかの暗号であるらしいこの文字は、張鐘午のメモに残っていた詩に登場するのだが、それがおそらくは『詩経浅見録』に載っていたのだろうと予測される。正祖の父である思悼世子の死についての真相が、どうも『詩経浅見録』には書かれており、正祖はこれを探すように張鐘午に命じていたらしい。すると、「親臨試講」は「維新」へのステップだったと見てよいようだ。だから、老論僻派はこの『詩経浅見録』を奪い取るうとしたのだ。

事件の核心を知ってしまった李人夢は、老論僻派から狙われ、正祖に事の次第を告げる間もなく滝壺に落とされてしまう。正祖が毒殺されるのはそれからわずか後のことだ。

最後は、李人夢が地方の底辺労働者、それもコレラで死んだ人間の死骸を運ぶ人足にまで転落している姿が描かれ、正祖の夢見た「絶対王政」がつかえたことが、強調されるのだが、一見して『薔薇の名前』の韓国版パロディである

ようにわかるだろう。また、作者であるイ・インファの古典についての知識が、それこそペダンチックなまでに披瀝されており、まるで当時の朝鮮王朝の状況が手に取るようにわかる、と思わせるように展開されている。そればかりか、悲劇の哲人王・正祖が「殺されている」という設定は、彼が「粗野で残酷な開発独裁」と呼ぶ朴正熙が「殺された」ことと通いつているだろう。ありふれて「歴史ミステリ」と呼ばれるこの小説は、前章で紹介した「社会犯罪小説」とは相容れないものであり、小説内世界に登場する正祖は、父である思悼世子が殺されていたという隠蔽された事実（＝過去の記憶）によって、「平穏な現在」を乱される存在である以上、「戦後探偵小説」とシンクロする部分も見受けられる。

もちろん、この作品は決して「戦後探偵小説」とはいえないし、またそれが存立するような社会的条件は、イ・インファの世代にはない。しかし、「戦後探偵小説」をパロディとして成立させようという意志がそこにみえる。まずは時代を李氏朝鮮時代後期へともつていくことで、自らが時代の空気として感じることのできなかつた「戦後」を直接描くのではなく、歴史小説として描いたということ。さらに、ベトナム戦争に参戦することで韓国に「戦後」を呼び戻した朴正熙に擬せられる正祖の存在が、この小説をして「戦後探偵小説」のパロディになさしめているということだ。これは、驚くべき文献を書庫で発見し、それを小説として発表するという、『薔薇の名前』のパロディとしての『永遠の帝国』の位置と通いつている。このパロディという手法はメタ・レベルでのミステリ創作ともいえ、ある意味で「アンチ・ミステリ」へと通ずる面をもっているのではないか。金聖鐘以後、韓国のミステリにおいて、唯一「アンチ・ミステリ」へと到達したのがこのイ・インファだったのだ*16。

松本清張は単純に「社会派」とくくれる作家ではないことは言を待たないが、彼の小説『点と線』『ゼロの焦点』で、「戦後探偵小説」は事実上終結してしまふ。その後は、中井英夫の『虚無への供物』など、「アンチ・ミステリ」によって、「戦後探偵小説」そのものを内側から越えていくという方向性を持ち始める。（もちろん、無自覚なものも多いが）それに対して、韓国で唯一「戦後探偵小説」を書いた金聖鐘の後継者は、歴史ミステリという形で「戦後探偵小説」の枠組み、その時代の雰囲気そのものをパロディ化する形のみ、それを越えることができたのだ。逆にいうと、「戦後探偵小説」を書いたのもひとり、それを理解し、乗り越えることができたのもひとりしかないということになる。いかに「純文学」の権威主義が文学メディアを枯らしてきたか、如実にあらわれているではないか。

もちろん、金聖鐘はまだ現役の作家であり、九〇年代以降は筆が衰えているとはいえず、まだ書き続けている。彼自身のこれからの作家活動をつぶさにみながら、日本のミステリ就中松本清張との比較研究は、むしろこれからより深く行われなければならないのではないかと思われる。

*1 本稿では基本的に「ミステリ」という言葉を採用するが、引用文献などで「推理小説」「推理文学」などの言葉が出てきた場合はそのまま使用する。また、タイトルにある「戦後探偵小説」であるが、これは第一次世界大戦以降の大量虐殺時代としての二〇世紀が生んだ文学形式としてミステリを取り上げるとき、この言葉を使用する。

*2 たとえば「朝日新聞」昭和五六年十月一日の六面には、「純文学の韓国でなぜか推理小説ブーム」と題して金聖鐘を特集している。このなかで金

聖鐘は「ブームの火付け役は、¹⁾ 韓国の松本清張」といわれる延世大出身の作家金聖鐘氏」と紹介されている。また、金聖鐘について唯一まとまった研究業績といえるベク・ヒュー氏の『金聖鐘を読む』(図書出版南島、一九九九年)では、「金聖鐘VS松本清張」という一章を設けている。このように、ミステリが途切れていた韓国にミステリを興した人物として、金聖鐘は評価されており、その代名詞として「韓国の松本清張」と呼ばれているようだ。それは、戦後日本ミステリのなかでの松本清張の位置に敬意を表していることと思われる。

*3 そもそも、「純文学」なるものは成立しないだろう。いや、なにをもつて「純文学」と称してきたかを定義することはできるかもしれないが、少なくとも筆者はこのようなことに関心がない。ミステリやSFのようなジャンル化される小説(ジャンル小説)に対して、そのようなジャンルに属さない小説という意味で「ノンジャンル小説」というジャンルが存在しているとみている。それがいままで、書いた作家の「文壇」での位置や書いた媒体のレベルなどから「純文学」、「大衆小説」あるいは「通俗小説」という分け方をされてきたということになる。鈴木貞美氏は『日本の「文学」を考える』(角川書店、一九九四年)、『日本の「文学」概念』(作品社、一九九八年)などで、一連の「文学」概念、「純文学」概念について細かく考察しているが、彼はここで「文芸」という新しい呼称を提唱する。確かに懐深い「文芸」なる呼称ですべてをくくると、「聖なる作品」と「俗なる作品」という旧態依然たるイメージ(「純文学」と「大衆文学」)はここでいったん終わらせることができるが、それではホラーやSF、ミステリなど、公然と存在する「ジャンル小説」をとらえにくくしてしまうと考え

る。筆者が「ジャンル小説」と「ノンジャンル小説」に分けて考えるゆえんである。

*4 ちなみに、韓国におけるミステリ研究は、主なものとしては次のものがある。

日本語文献

李建志「京城の探偵小説」(東大大学院比較文学比較文化専攻修士論文、一九九四年)

一 「韓国「探偵小説」事始め」(『創元推理』五号、一九九四年七月)

一 「金来成という歪んだ鏡」(『現代思想』一九九五年二月)

一 「韓国現代ミステリの思想と行動(上)」(『創元推理』二〇号、二〇〇〇年十月)

一 「韓国現代ミステリの思想と行動(下)」(『創元推理』21『創元推理』二〇〇一年五月)

韓国語文献

大衆文学研究会編『推理小説とは何か?』(国学資料院(ソウル)、一九九七年)
ベク・ヒュー『金聖鐘を読む』(図書出版南島(ソウル)、一九九九年)

他にも、金聖鐘氏が中心になってつくられた『季刊推理文学』などの雑誌(推理文学社(ソウル)、一九八八〜一九九四年)に、若干エッセーが載っている。

*5 金聖鐘は一九九〇年前後から、推理小説専門誌『季刊推理文学』を創刊し、「金来成推理文学賞」を設定して一九九〇年から一九九三年までに三

人の受賞者を出している。

一九九〇年 第一回受賞 クォン・キョンヒ『震える手の先』(推理文学社刊)

一九九一年 第二回受賞 イ・スンヨン『ミス・コリア殺人事件』(推理文学社刊)

一九九二年 第三回受賞 イム・サラ『愛するとき、そして死ぬとき』(推理文学社刊)

一九九三年 第四回 該当者なし。

また、一九九三年には釜山に「推理文学館」を建設、運営するなど、韓国推理小説の発展と後進の育成に力を注ぎはじめる。その分、作品活動は鈍くなるため、本稿では一九七〇年代の作品を中心に考察する。

*6 これは金聖鐘氏自身の考えでもある。「国際新聞」一九九四年五月二十八日付参照。

*7 金来成(一九〇九年―一九五七年)は韓国ミステリの祖であるが、これについてはここで論じる余裕はない。前出の拙著「韓国「探偵小説」事始め」および「金来成という歪んだ鏡」参照。また、解放前(戦前)の韓国でのミステリ翻訳などに関しては、拙著「京城の探偵小説」に詳しく述べられている。ちなみに、金来成以外の作家によるミステリについて説明すると、解放後(戦後)の一九五〇年前後に方仁根などが張飛虎という探偵を仕立てて連続してミステリを書いているが、これは実はコナン・ドイルの「シャーロック・ホームズ」を翻案したもので、残念ながら独自の作品とはいえない。金来成が死んだあと、韓国ミステリが復活するまでに金聖鐘の

デビューを待たなければならず、それが二〇年以上の間隔があったことは、金聖鐘の作品をしてミステリだと認識する受け皿を失わせるのに十分なインターバルだったといえよう。

*8 白丁とは、韓国の被差別民で、柳細工の製造販売、あるいは畜獣の屠殺などに従事していた。そしてそのような職業が、さらに彼らへの差別意識を再生産していった。一般集落に住むことは許されず、彼らだけの集落を郊外に形成した。奴婢と違い身分上昇の機会はとざされていたが、一八九四年の甲午改革で身分解放された。しかしその後も差別は残存し、一九二三年には日本の水平社に刺激されて衡平社を結成し、解放運動を開始した。現在は南北朝鮮ともに身分としての白丁は消滅したとされている。『朝鮮を知る事典』(平凡社、一九八六年)参照。

*9 『最後の証人』(太宗出版社、一九七七年初版一刷)より。定価は一五〇〇ウォン。

*10 セマウル運動は一九七〇年に韓国ではじめられた「新しい村づくり運動」で、セ(＝新しい)マウル(＝村)という意味である。農民の意識の活性化による遊休労働力の動員から出発し、社会資本を充実させ、農村の近代化、農家所得の増大、農業生産力の拡大を図ることをねらいとする。一九七〇年朴正熙大統領の指示に基づき、〈自助・自立・協同〉のスローガンのもとに主に農民の自己負担により農閑期の生活環境改善事業が開始された。一九七二年に運動の推進機構が全国的に整備されるとともに、スローガンも〈勤勉・自助・協同〉と変更され、朴正熙政権の「維新体制」を支える重要な柱となった。セマウル運動の背景として、工業化の進展と対照的な農村の停滞、朝鮮民主主義人民共和国との農業部門での対抗関係、

「維新体制」への農民の結集の必要などがあげられるが、最後の国民統合の側面は都市セマウル運動、工場セマウル運動という形で農村から都市へ波及した。セマウル運動の結果、農村には生産と消費の両面から商品経済が急速に浸透し、農民の階層分化が進んでいる。「朝鮮を知る事典」(平凡社、一九八六年)参照。

*11 大衆文学研究会編『推理小説とは何か?』(国学資料院(ソウル)、一九九七年)収録の論文と執筆者は次の通りだ。

ウツリツヒ・プロイヒ著 チン・サンボム訳「推理文学に対して」

ブワロー・ナルスジャック著 チン・ジョンゴン訳「推理小説の起源」

ソン・ドクホ著「推理小説の類型」

トーマ・ナルスジャック著 キム・ジュンヒョン訳「推理小説—アングロサクソンの伝統とフランスの伝統」

キヤロリン・ハイブロン著 バク・オボク訳「性と推理小説」

イ・ガヒョン著「現代世界推理小説の動向」

林保淳著 チョン・ドンボ訳「中国の公案小説の理解」

李建志(筆者自身)著「日本の推理小説—反文学の形式」

イム・ソンネ著「開化期の推理小説」

キム・チャンシク著「推理小説形成期の動向と金来成の『魔人』」

チョン・ヒモ著「推理技法の変容、叙事化の可能性—金聖鐘の『最後の証人』」

にあらわれた推理技法を中心に」

イ・ウンジャ著「歴史推理小説の大衆性と文学的可能性—イ・インファの『永遠の帝国』を中心に」

イブ・オリビエ・マルテン著 イム・ソンネ、キム・ジュンヒョン訳「フランス大衆小説史、発生」

ベルンハルト・ジンモーマン著 チン・サンボム訳「大衆小説と大衆学問的文学(3)」

みてわかるとおり、研究といってもミステリ各国事情といった趣きがある。また、国内ミステリに関する研究も金来成、金聖鐘、そして後述するイ・インファといった、有名作家に対してひとつずつしか論文が書かれていないことなど、研究のおくれが目立つ。これらがこれからの課題としてあげられるだろう。

*12 念のためにいうが、「社会派」ミステリがだめだといっているのではない。「社会派」の作品にも深い内容のもの、名作傑作といえるものも多い。しかし、ここでは「戦後探偵小説」、それも日韓でのその誕生の必然性という意味で考えたため、俗流の「社会派」(綾辻氏の引用文にあった、「1DKのマンションでOLが殺されて、靴底を擦り減らした刑事が苦心の末、愛人だった上司を捕まえる」という「汚職や現代社会の歪み」を扱ったもの)をあえて対抗軸にすえた。もちろん、森村氏の作品にもみるべきものはあると考えている。

*13 なぜ金載圭が朴正熙を殺したのかについては、はっきりしたことはまだわかっていない。ただ、「釜馬事態」を收拾できない責任を追究されたのを原因に数える説がある。反体制運動と密接な関係があることは、ほぼ間違いないだろう。

*14 一九八七年の大統領選挙では、全斗煥の後継者に指名された盧泰愚と、

野党の金大中、金泳三、金鐘泌の三人（いわゆる「三金」）が、非妥協的な選挙戦を繰り広げた。この「三金」の争いを「三金レース」と呼ぶわけだが、これは朴正熙暗殺直後にすでに下地がつけられていたのだ。ご存じの通り、この時の選挙は盧泰愚が辛勝し、五年後の一九九二年の大統領選挙では、与党に合流した金泳三が当選、そして一九九七年の大統領選挙では、金大中が与党候補を敗って韓国初の政権交代を実現した。

*15 一九八七年の大統領選挙を前にして、やはり反体制的なデモが全国に広がり、与党の後継者であった盧泰愚は「民主化宣言」を発表するに至る。（一九八七年六月）この民主化を勝ちとるまでの闘争を「八七年民主化闘争」と呼ぶ。「緊急措置世代」と、その少し後を歩く「八七年民主化闘争」を主導した世代には少しズレがあるようだ。

*16 イ・インファのパロディは、この後も続いている。先にも述べたとおり二〇〇〇年度に李箱文学賞を受賞した短編小説「詩人の星」は、『永遠の帝国』同様に、偶然発見した意外な内容の文献を、小説として発表するという内容で、その悲劇的な結末とともに、やはりパロディとしてのミス터리に通じる手法だと考える。

（り）けんじ・県立広島大学人間文化学部国際文化学科助教授

平成十八年一月三十一日発行

第六回松本清張研究奨励事業研究報告書

編集・発行 北九州市立松本清張記念館

北九州市小倉北区城内二番三号

電話 ○九三―五八二―二七六一

印刷・製本 (株)ゼンリンプリンテックス

松本清張研究奨励事業

第8回

募 集 要 項

一、趣 旨

時代を見つめ続けた松本清張の文学を研究することは、今後の時代の進むべき方向性と私たちの生きていく指針を見出すことにもつながります。このような視点から、清張の作品や人物像についての研究活動を推進し、歴史や社会の事象の深層を追求する精神を継承していくため、松本清張夫人ナヲ様のご厚意により創設しました。

二、対 象

ジャンルを問わず、松本清張の作品や人物像を研究する活動や、松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動(調査、研究等)で、これから行おうとするもの。年齢、性別、国籍は問いません。ただし、未発表に限ります。個人または団体も可。

三、内 容

入選者(団体)に二〇〇万円を上限とする研究奨励金を支給します。金額は企画内容を検討して決定します。

四、応募規定

今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的にわかる企画書、予算書、参考資料など(様式は自由、ただし日本語)を、平成十八年三月三十一日までに応募してください。

五、選 考

松本清張記念館内の選考委員会により選考します。

六、発 表

審査終了後、審査結果を直接通知します(六月末頃)。なお、入選者には開館記念日(八月四日)に、北九州市で贈呈式を行います。

七、その他

採用された企画は翌年の六月末日までに実施成果を報告していただきます。また、成果品である研究論文、報告書等は記念館が刊行予定の研究誌に掲載することがあります。成果品にかかる著作権等諸権利は、北九州市に帰属します。

八、応募先

〒八〇三〇八二三 北九州市小倉北区城内二番三号
TEL〇九三(五八二)二七六一 FAX〇九三(五六二)一三〇三

北九州市立 松本清張記念館